

英語における主語・述語の倒置

伊 藤 清

英語に於ける主語・述語の倒置は疑問文、祈願文、描出話法や假定法の文、引用符の後の *said he* の類に見られるが、それらは大体一定の形態を持つものであり、それらの語順の理解も使用も比較的容易である。これらに対し、頻繁に使用されながらも、殊に平叙文で副詞（句）、叙述形容詞、動詞の目的語としての名詞などが文頭に置かれた場合に生ずる倒置はその原因も形態も一様ではない。また時には文頭に強調の語句もなく、動詞そのものが強められて文頭に来る場合もある。単に主語・述語の倒置であっても述語動詞には単一時制の場合と複合時制の場合とがあり、単一時制の場合でもその形のままで使用する時もあれば *do* を用いて動詞を分解して使用する時もあり、両時制とも主語に対してすべて前に来る時もあれば、前後に来る時もある。しかしながらどのような場合でもそれなくしては有効に伝達が成立し得ない言語のもつ一定の傾向なり原理なりは存在する。それらを辨えることは文の理解と伝達を一層効果あるものとする。以下の例文で *be* 動詞に関する倒置は *be* + 主語 の形のみであるので特に説明に必要な場合以外は省略した。

I

平叙文の時、主語・述語の倒置が頻繁に起るのは副詞（句）が文頭に出た場合であり、その中でも否定の副詞が文頭に出た場合である。それらが文頭に来るのは否定の意味内容であることを強くまた早く伝えようとする為である。

Never に引かれて、複合時制の場合には助動詞が主語の前に出、それ以外の動詞は主語の後に来る。単一時制の場合には動詞は分解されて助動詞 do が援用されることが多く、there が主語のように用いられている時も be 動詞の複合時制はその前後に分けて用いられる。Alexander Bain の言う the rule of proximity に基づく修飾関係及び平叙文としての主語・述語の語順を共に満足させる。

1 Never shall I forget the sensations of awe, horror, and admiration with which I gazed about me. —Poe: *A Descent into the Maelström*

2 Never in all his life had he been so vilely treated, and never in all his life had he been so angry. —London: *The Call of the Wild* (彼は今迄こんなに酷く取り扱われたことはなかったし、また今迄こんなに怒ったこともなかった。)

3 Never did people believe anything more firmly... —Arnold: *Culture and Anarchy*

4 Never have I had such a strong fish nor one who acted so strangely. —Hemingway: *The Old Man and the Sea*

5 Never had there been so full an assembly, —Galsworthy: *The Forsyte Saga* (こんなに一族が揃ったことはこれまで一度もなかった。)

6 Never had Hester Prynne appeared more ladylike, —Hawthorne: *The Scarlet Letter*

7 Never had I listened to such an extraordinary speech. —Forster: *The Story of a Panic*

Never と倒置の箇所とは接するとは限らず、文の構成上、且つ理解の妨げとならない限り、かなり離れている例も見られる。

8 Never in all the fifteen years since he had first found out that life

was no simple business, *had he found* it so singularly complicated. — Galsworthy: *The Forsyte Saga* (人生は決して簡単なことではないと最初に悟ってから15年になるが、これほど人生がひどく複雑なものだと悟ったことはなかった。)

Not, not only, not till などの語句が文頭に使用された時も同じ傾向が見られる。次の9の他動詞 *had* は the Bear *had* の形でも、また分解して *did the Bear have* の形でも使えるが、*had* があまり強調されたものでない為に分解されなかったものであり、また37に見られるように英国でも使われることもあるが、このままの形が英国で多く見られる 習慣的な形である為でもある。米国に於てもこの両方の形は相半ばする (26)。11は複合時制であるにも拘らず動詞が主語の前後に分れなかったのは、前の2句が強く、且つ後の主語も比較的長くこれに重点を置いた為であり、文の均斉から言っても当然の位置であると言える。12の *not* は *for years*を修飾するものではなくて *she had not felt* を意味する。

9 Not only in reach and stature *had the Bear* the advantage of him, —London: *The Son of the Wolf* (腕の長さや身長においてベアは彼に勝っていたばかりでなく)

10 Not till days afterwards *did he realise* that it had been a piece of April foolery. —Hilton: *Good-bye, Mr. Chips* (それが4月馬鹿のいたずらだったことに気付いたのはずっと幾日も経ってからのことだった。)

11 Yet not until the last instance, amid the most convulsive writhings of her fierce spirit, *was shaken the external placidity of her demeanor*. —Poe: *Ligeia* (命絶える最後の一瞬まで、その激しい精神の極度の痙攣的悶えの真只中において、彼女の態度の外面的静けさはかき乱されることはなかった。)

12 Not for years *had she felt* so full of youth and courage. —Anderson:

Winesburg, Ohio

13 Not till the nineteenth century *did Noah Webster succeed* in arousing Americans to the need for nationalizing their education. —Brubacher: *A History of the Problems of Education*

No, no sooner, no longer, no more, etc. 従属文に於ても倒置の原則は変らず、例も屢々見られる。14 は古い、修辭的な表現であり、*did I ever feel yet* とする方が現代文風であろう。

14 no shadow of which *felt I ever yet* in the contemplation of the certainly glowing yet too concrete reveries of Fuseli. —Poe: *The Fall of the House of Usher* (フューゼリの描く確かに燃え輝く、しかも余りにも具象的な幻想画を眺めてさえ、その堪えがたい畏怖の念などは些かも感じなかったのであったが)

15 No sooner *had I closed* my eyes than I heard her cry of alarm. —Conrad: *The Lagoon*

16 No longer *do I have* to think about it even. —McCullers: *A Tree. a Rock. a Cloud* (私は愛するということさえもう考えなくてよいのだ。)

17 No more *was Spitz* a leader greatly to be feared. —London: *The Call of the Wild*

Neither や nor が文頭にある時にも上述の否定語が文頭に出た時と同じ形式を取る。19 は *he knew not* where (London: *Love of Life*) のように古い、もしくは美文式的、感じを与える。*did he know* の形が一般的である (29)。20 の *had he* に就いては既に述べた。22, 23 は孰れも文尾の *he, death* を強めたものである。

18 Neither *could I forget* what I had read of these pits...—Poe: *The*

Pit and the Pendulum

19 Alas! neither by day nor by night *knew I* the blessing of Rest any more! —Poe: *The Black Cat* (ああ、私は昼も夜ももはや安らぎの恵みを知らなかった。)

20 but neither *has he* the strength of hope which gushed as a fountain in the heart of youth. —Dreiser: *Sister Carrie*

21 neither *do they seem* at all to promise to become, like light and air, a common free property of the human race. —Arnold: *Culture and Anarchy* (またそれらは日光や空気のように人類の共有の自由財産となりそうにも全く思われない。)

22 She did not speak, neither *did he...* —Galsworthy: *Indian Summer of a Forsyte*

23 Life had no more secrets for him; neither *had death*. —Conrad: *An Outpost of Progress* (生は彼にとりもはや神秘ではなかった。死ももはや神秘ではなかった。)

24 We had no means of calculating time, nor *could we form* any guess of our situation. —Poe: *Manuscript Found in a Bottle* (我々には時間を計る手段はなく、位置を推定することもできなかった。)

25 Nor *did he open* his eyes till roused by the noises of the waking camp. —London: *The Call of the Wild* (また彼は目覚めゆく宿営地の騒音で起こされるまで眼をあけなかった。)

26 He had never seen a dog go mad, nor *did he have* any reason to fear madness; —*ibid* (彼は犬が発狂するのを見たことがなかったし、また狂気を恐れる理由もなかった。)

27 Nor *had I erred* in my calculations — nor *had I endured* in vain. —Poe: *The Pit and the Pendulum* (私の計算に誤りはなかった — 忍耐も無駄

ではなかった。)

Little, hardly, rarely, scarcely, seldom, still less 等文否定の意味を有する副詞(句)を強めて文頭に置く時にも動詞がそれらに引かれて屢々倒置が起こる。次の最初の例に見られる形は古くまたしかつめらしい。Little を強く感じるならば現代文では普通 *Little did the Catholic prelates guess* の形を採るであろう。他の場合にも当て嵌まることであるが、文頭に来る修飾語、補語あるいは目的語を強める気持が余り強くなければ、あるいは前文に於ける語句との対比の目的でその語句のみを文頭に置いて強める場合には、ふつう倒置は行なわれない。また文頭の語句を強める気持が強く、倒置が生じた場合でも単一時制の時にはそのままの形で使用される時もあり、助動詞 *do* が援用される時もある。従って文頭に置く語句の意味内容に対する書き手の考え方如何は倒置に影響するところが大である。Little が文頭にあるからといって主語・述語の形を採らないとは言えない。

28 *Little guessed the Catholic prelates the dimensions of the act which had been done.* —Froude: *Times of Erasmus and Luther* (そのカトリックの僧侶達は行なわれた行動の大きさを少しも推察しなかった。)

29 *Little did I know that I would be gone by then, to a different life.* —O'Brien: *Girl with Green Eyes* (私は別の生活をする為にその時迄にそこを離れてしまっているだろうとは夢にも思わなかった。)

30 *Scarcely had Arakawa completed his term of imprisonment,* —Hearn: *The Story of Kwashin Koji* (荒川が入牢の期間を終えるか終えないうちに)

31 *Very rarely do I hear even a clink of crockery;* —Gissing: *The Private Papers of Henry Ryecroft* (瀬戸物類のふれ合う音さえ聞くのは非常に稀である。)

- 32 Still less *do you understand* feminine human nature. —Christie: *The Case of the Discontented Husband* (ましてあなたは女性の性質を理解していない。)

否定の語句以外に、時間、頻度、様態、度合、場所等を表す副詞（句）が文頭に来た場合もこれらの原則、傾向は変らない。但し必ずしも文頭の語句に引かれて倒置が行なわれるとは限らない。即ち最初の2例は副詞句の強調と共に、主語も強調されて文尾に回ったものである。35～37では強められた副詞句に引かれて定石通り軽い助動詞が主語に前置されたものである。38では Always they take の形も用いうることを考えればこの倒置の形は Always の意味も強くまた take をも強めたものである。即ち主語・述語の形で用いうるにも拘わらず余分な do を用いるのはその動詞を強めようとする意図を示しているからである。このことは倒置形ではなくとも they *do* take を考えれば理解しうる。これらのことは次の39に於ける倒置にも当て嵌まる。

- 33 In the morning *were the manoeuvres*. —Lawrence: *The Russian Officer*
(朝のうちに演習があった。)

- 34 And at such moments *was her beauty*. —Poe: *Ligeia*

- 35 For long hours, detaining my hand, *would she pour out* before me the overflowing of a heart...—*ibid.* (幾時間も私の手を執って彼女は溢れ出る心情を私に吐露するのであった。)

- 36 Long—long—long—many minutes, many hours, many days, *have I heard it*...—Poe: *The Fall of the House of Usher*

- 37 Only after weeks of vain effort *did someone have* an idea that would work.—Orwell: *Animal Farm* (幾週間も無駄な努力をした後でやっとうまく行く考えを思いついた。)

- 38 Always *do they take* the choice meat at the killing. —London: *The*

Son of the Wolf (何時も彼等は狩の獲物のあった時一番良い肉を食べる。)

39 Only a month ago *did I return*. —Lucas: *The Face on the Wall*

40 At the start of the winter *came the permanent rain* and with the rain *came the cholera*. —Hemingway: *A Farewell to Arms* (冬が始まると長雨がやって来、雨と共にコレラが発生した。)

40 の *came* に関しては *do* を用いて主語の前後に分置することは比較的少い。*come* や *go* など往来を表わす日常頻繁に用いられる卑近な語は特別な場合を除いて強い意味で用いられることは少く、従って助動詞 *do* を用いて強めることも少いからである。How *come* you to say that? How *goes* it? などの形は普通見られる所であり、極端になれば動きよりもその結果たる状態に重点を置く余り *come*, *go* の類は用いられず、I helped him (*come, go*) out (*or in, up, down*). Do you want him (*come, go*) back? などの表現となり、あるいは命令で Away!, Back!, Out! などとなる。41 の *rushed* も *came* の変形であり、更にこの文では主語は長く意味は強い。また *away, down, in, on, out, over, up* などが強められて文頭に来る時にはこれらの動詞は軽く、文のリズムに支配されて主たる名詞は文尾に来る。故に原則的には強調をもたない代名詞が主語の時には 56 の *away they went* のようにそれより強い動詞は後置されて、結局倒置は行なわれないことになる。

41 Then *rushed upon me a thousand memories of Ligeia*. —Poe: *Ligeia*

42 In *came the three Miss Fezziwigs*, beaming and lovable. —Dickens: *A Christmas Carol* (にこやかに可愛らしく3人のF.の娘たちが入ってきた。)

43 Out *came Meg*, —Alcott: *Little Women*

Now や then あるいは *thus* や *so* は強調の度合は弱く、引用例に見るように、

倒置の形もあり、あるいは単一時制では *do* を用いることもあるが、倒置でない形を採ることの方が多い。44 は *Now I will tell* の形が普通であり、例文の形は著者の癖あるいは技巧的な表現形式であると言える。45, 46 も *now* を強く感じた為に生じた倒置であるが、倒置でない形を用いることを考えれば既に述べたように後置された *I* を強め、また *burned* を強めた修辭的表現である。特に *burn* には *with* 以下の副詞句が付いているのを見てもこの語の重要性が分る。48 では *Then did silence follow* の形も考えられるが、この場合も動詞は既に述べた *come, go* に類するもので、余り意味を強められたものではなく、49 と同様倒置はむしろ主語が長くこれを強調することに起因している。

44 *Now will I tell* you of my people, —London: *The Son of the Wolf*

45 And now *was I* indeed wretched beyond the wretchedness of mere Humanity. —Poe: *The Black Cat* (今や私は普通の人間のみじめさ以上に本当にみじめなものであった。)

46 Now, then, *did my spirit* fully and freely burn with more than all the fires of her own. —Poe: *Ligeia* (さて今や私の心は彼女自身の全情熱以上の情熱をもって存分に生々と燃えさかったのであった。)

47 And then *came this astonishing girl-wife* whom nobody had expected... —Hilton: *Good-bye, Mr. Chips* (そこへ誰もが予想もしなかったこのすばらしい若い妻がやって来た。)

48 Then *followed silence*, dead as ever, —Galsworthy: *The Apple Tree*

49 the fire-irons came first; then *followed a shower of saucepans, plates, and dishes*. —Carrol: *Alice's Adventure in Wonderland* (先ず最初に火箸がとんできました。それからソースパン、小皿、大皿が降り注いできました。)

50 に於ける *Often* は文頭にあって意味が強く倒置の原因となっている。52 の

opened など日常頻繁に使用される語は *have* 等に類する使い方をされることがある。またこの主語は形容詞節に修飾されて長い。55 でも *they peeped* の形を使いうることを考えれば、既に述べたようにこの倒置は動詞も強めている。尚 56 の *With other men* の場合のように前置された語句を少し強める程度のものであれば、28 に関連して述べたように、また後述する目的語が文頭に来る場合と同様、倒置は起こらない。

50 Often, however, *did the mountains* which had been familiar to him in his childhood *lift* their snowy peaks into the clear atmosphere of his poetry. —Hawthorne: *Twice-Told Tales* (しかし少年時代に彼が親しんだ山々は屢々彼の詩の明るい大気の中にその雪の嶺を聳えさせた。)

51 Only once *had he taken* Valentin to the Tuileries. —McCullers: *The Sojourner* (たった一度だけ彼は V. を T. 公園に連れて行ったことがあった。)

52 And now slowly *opened the eyes of the figure* which stood before me. —Poe: *Ligeia*

53 Most complacently *did Mrs Munt rehearse* her mission. —Forster: *Howards End* (M. 夫人は極めて満足して任務の下稽古をした。)

54 and most admirably *did he play* his part. —Poe: *William Wilson* (そして極めてみごとに彼はその役割を果たした。)

55 Sagaciously, under spectacles, *did they peep* into the holds of vessels! —Hawthorne: *The Scarlet Letter*

56 With other men *he lived* in a box-car and away *they went* from town to town... —Anderson: *Winesburg, Ohio*

57では Only thus を強いと感じて倒置を行なったものであり、倒置でない形もありうる。58 の述語動詞はすべて主語の前に出、*ancestors* も in this manner と

共に強められているが、自動詞 *fought* を文尾に回せばこれが強められることになる。59 の場合でも、これは *the other dogs* を強めたものであるが、*did* を文尾に置けばこれが強まる。60~62 は *so* や *so also* を強く感じた為の倒置であり、60 に於ては文尾の *also* も *everyone* に劣らず強められている。

57 Only thus *could he hope* to become truly rational.—Brubacher: *A History of the Problems of Education* (このようにしてのみ彼は本当に理性的になることを望み得たのである。)

58 In this manner *had fought forgotten ancestors*. —London: *The Call of the Wild*

59 He felt it, as *did the other dogs*, —*ibid.*

60 But immediately after that she was very wide awake indeed, and so *was everyone also*. —Lewis: *The Lion, the Witch and the Wardrobe* (でもその後で彼女は実際にはっきりと目を覚まし、そしてみんなもまたそうでした。)

61 While he spoke, the lady Madeline (for *so was she called*) passed slowly...—Poe: *The Fall of the House of Usher*

62 As he has raised me so *also will he raise you*.—Anderson: *Winesburg, Ohio* (神様が私を立ち上らせてくださったように、あなたも立ち上らせてください。)

以下3例は文頭の副詞の強調による倒置であるが、64は44と同様古い、技巧的な表現であり、倒置でない方が普通の形である。65の *came* については40の場合に述べた通りである。

63 Rather *did he describe* an idealized type of man of affairs of his day. —Brubacher: *A History of the Problems of Education* (むしろ彼は

当時の理想的タイプの実務家を描いた。)

64 *still shall you be Charley to me, and I Otoo to you!* —London: *The Heathen*

65 *Still came the battery of flowers,* —Hawthorne: *The Scarlet Letter*

次の最初の2例は前置の句が強められたことによる倒置であり、倒置でない形も考え得る。擬声語の場合69では一番普通の形は *The gun went bung.* であろうが擬声語が強められて副詞的に用いられたことが倒置を生ぜしめている。

66 *and, so greatly did hunger compel him, he was not above taking what did not belong to him.* —London: *The Call of the Wild* (そして余りにもひどい飢えに駆り立てられて、彼は自分のものでないものを取ることを恥とも思わなかった。)

67 *Thus, thus, and not otherwise, shall I be lost.* —Poe: *The Fall of the House of Usher* (こんな風にして、こんな風にして、これ以外のどんな風にでもなく、僕は死んで行くんだ。)

68 *Not otherwise had I advanced the day before, when Emily's nieces showed me their guinea pigs.* —Forster: *The Curate's Friend* (それ以外には私はその前日何ら進んでいなかった。丁度その時 E. の姪たちが私に彼等のモルモットを見せてくれた。)

69 *Bang! went the gun.*

70 *and ere the day was done, so well had he mastered his work, his mates about ceased nagging him.* —London: *The Call of the Wild* (それでその日が終るまでにバックは自分の仕事をみごとにおぼえてしまったので、仲間達は彼をいじめることを殆んどやめた。)

Here, there が文頭に出る時の主語・述語の倒置は *be* 及びそれに類する自動

詞の場合の定形であるが、それらの副詞と共に更にその前に場所その他を示す副詞（句、節）が来る時にも主語・述語の順は逆になるのが普通である。しかもそれらの動詞は、状態を表すものも動作を表すものも、殆んどの場合全部が主語の前に来て、主語の前後に分れることがない。これらの形態を取るのは、これら副詞に動詞が引かれた為と更に大きな理由としては主語を強める心理が作用したことによるものである。そしてそれらの動詞は状態を示す時は be 動詞及びそれに類するものであり、動作を示す時は come, go かそれらに類するものが殆んどである。

71 At this moment there *was* a tremendous uproar. —Orwell: *Animal Farm*

72 With Madame Zilensky *were* there three children, boys between the ages of ten and six, all blond, blank-eyed, and beautiful. —McCullers: *A Tree • a Rock • a Cloud*

73 On the third finger there *flashed* a big emerald carved with the arms of her family. —Christie: *The Case of the Rich Woman* (薬指に彼女の家の紋章の刻まれた大きなエメラルドが輝いていた。)

74 It was the work of the rushing gust – but then without those doors there *DID stand* the lofty and enshrouded figure of the lady Madeline of Usher. —Poe: *The Fall of the House of Usher* (それは吹き込む疾風のなせるわざであった — それでも尚ドアの外に丈の高い、死装束をつけたアッシャー家のマドライン姫の姿が立っているではないか。)

75 where there *had accumulated* a miscellaneous pile of metal junk, all covered with dirt: —Faulkner: *Centaur in Brass* (そこにはすっかり埃をかぶった種々雑多な古金属の山が積み上げられていた。)

76 and, at length, there *sat* upon my very heart *an incubus of utterly causeless alarm*. —Poe: *The Fall of the House of Usher* (そして遂に私

の心臓の真上に全く根拠のない恐怖の夢魔がのしかかって来た。))

77 Under the trees of her dream-gardens there *had* always walked a lover. —Crane: *Maggie: A Girl of the Streets*

78 Up the avenue there *plodded* slowly a man with sullen eyes. —*ibid.*

79 As if planted on purpose for him, there soon *appeared* a little tuft of maples, —Hawthorne: *Twice-Told Tales*

上例 72 の場合のみ there were の順が逆になっているのは Zilensky が強く, were がそれに引き出された為及び文のバランスの為と思われる。73 の *flashed* は was の変形で意味は弱く, 74 は did よりも強意の *DID* を用いて stood を分解して意味を強めたものである。且つまた *stand* を強めて文尾に置くのには 75 の場合と同様主語が長すぎる。75 と同様 76 も be の変形であり, 77~79 の自動詞はすべて came, went に類するものであり, 且つ主語を文尾に置いて強めようとするものである。

There が用いられていなくても場所の副詞 (句) が強められて文頭に出た場合, それが there に代る働きをして動詞が主語の前に来ることが極めて多い。以下の例の述語動詞は夫々独自の意味を有してはいても繫辞 be の変形とも言えるものであって具体的意味は薄く軽い。自動詞で文のリズムとしても強弱強の弱になるものであり, 従ってそれを do を用いて強めることは殆んどなく, まして主語の前後に分離して強めることは一層少い。Be を初めとし lie, sit, rest, stand, live 等が多く見られる。86 の *rose* も, また 87 の *shone* も, 73 の *flashed* と同じく, 共に was の変形である。

80 Across the threshold *lay* a great wolf. —Lewis: *The Lion, the Witch and the Wardrobe*

81 on the other sat a stout, light-eyed, red-faced youth —Galsworthy:
The Apple Tree

82 Upon its shelves rested pyramids of shimmering glasses that were never disturbed. —Crane: *Maggie: A Girl of the Streets* (その棚の上には今迄一度も手の触れたことのないピラミッド型に積まれた微かに光っている眼鏡があった。)

83 Across the way, through Madison Square Park, stood the great hotels, looking down upon a busy scene. —Dreiser: *Sister Carrie*

84 Back in his own room hung his old clothes, just as he left them. —*ibid.* (奥の彼自身の部屋に彼の古い服がそのままかかっていた。)

85 In it, under a tall cross much out of the perpendicular, slept the man who had seen the beginning of all this; —Conrad: *An Outpost of Progress* (その中に非常に傾いた高い十字架の下にこのことの始まりを見た男が眠っていた。)

86 Between me and the church spire rose a little hill. —Hawthorne:
Twice-Told Tales

87 In the balcony, and here and there below, shone the impassive faces of women. —Crane: *Maggie: A Girl of the Streets*

次例もすべて be 動詞の変形と見なしうるもので、例えば 88 の *contained* は文尾に置けば強まるがそれ程力点を置いているわけではなく、主語の方を重視して文尾に置いている。他の例も主語自体が長いから、関係詞によって修飾されていて動詞を文尾に置けば助動詞と離れすぎ意味の取り難いものとなる。

88 In the act is contained the counteraction. —Fromm: *Dream Interpretation* (その行動には反作用が含まれている。)

89 and the next morning every few yards along the road would be

the old ones who couldn't keep up any more, sitting or lying down...

—Faulkner: *The Unvanquished* (そして翌朝道には数ヤード毎にもうついて行けなくなった老人達がいた。彼等は坐り、横たわり)

90 In all were displayed the curious and vagrant taste of Margaret Leland. —Yeats: *John Sherman* (すべてのものにM.の奇妙な気まぐれな趣味が示されていた。)

91 Near by, beneath the brambles, could be seen a bundle and what looked like the handle of some tool. —Murdoch: *The Sandcastle* (すぐそばで、いばらの繁みの下に、包みと何かの道具の柄らしいものが見えた。)

92 Inside had gradually accumulated a core into which all the energy of that young life was compact and concentrated. —Lawrence: *The Russian Officer* (内部には次第に凝って一つの芯ができ、その中にあの若い力がつめこまれ凝縮された。)

上述の状態を示す動詞に対し、動作を示す動詞には come が多く見られるが、その他以下のような自動詞の例は多い。94, 95 の動詞 *appeared*, *flowed* などは came の、96 の *roared*, 97 の *were running* は went の変形であり、*grew* は弱く、*sounded* にもこの場合大して意味はない。従って例えば 86 の *rose* を did... rise, 96 の *roared* を did... roar, 97 の *were running* を were... running とすれば夫々の動詞の意味が作者の意図以上に強まることになったであろう。故に副詞の働きをするものが文頭にあっても、既に述べたようにその意味の強さ、主語、述語の強さ、更に文の均斉等のかね合いによって主語と述語の倒置が決定される。

93 From the ranches near and distant came the sound of dogs turning up for a night of song. —Steinbeck: *The Murder* (近くまた遠くの農場から合唱の夜にそなえる犬の声が聞えて来た。)

94 Within it, thrust partly out of the window, appeared the physiog-

mony of a little old man, —Hawthorne: *Twice-Told Tales* (馬車の中には窓からちょっと出している小柄な老人の顔が見えた。)

95 Below him *flowed a wide and sluggish river*. —London: *Love of Life*

96 Up the chimney *roared the fire*, and brightened the room with its broad blaze. —Hawthorne: *Twice-Told Tales*

97 In her mind *were running scenes of the play*. —Dreiser: *Sister Carrie* (彼女の心の中にその劇の光景が横切っていた)

98 In him *grew a majestic contempt* for those strings of street-cars that followed him like intent bugs. —Crane: *Maggie: A Girl of the Streets* (彼のうちに、一心になったかぶと虫のように彼に続く市街電車の行列に対する大きな軽蔑心が生じた。)

99 Over the Main Street *sounded a man's voice*, laughing. —Anderson: *Winesburg, Ohio* (向うの大通りから男の笑い声が聞えて来た。)

次の最初の3例は、上掲の主語の前にはのみ動詞の置かれた極めて多く見出される例と違って、主語の前後に動詞が分置されている。孰れも助動詞直前の句を強く意識したことにより、且つまた主語・述語の語順を用いるにも拘らず、それを逆にしたことより考えて動詞をも強めたものである。尚最後の例の *were* の前には夫々 *there* を入れることが可能であり、*hanging* は形容詞として *predicate appositive* (叙述同格語——主文に述べられたことと相前後し、あるいは並行して行われる動作・状態などを、主文の補足的説明として述べる表現法の中で、主文の主語、目的語などに関連して用いられる形容詞、分詞(いわゆる分詞構文に含まれる)、名詞その他を言う。)となっている。

100 From this inscrutable tyranny *did I* at length *flee*, panic-stricken, as from a pestilence; —Poe: *William Wilson* (疫病から逃れるように狼狽して私は遂にこの不可解な暴虐から逃げ出した。)

101 But in death only, *was I* fully impressed with the strength of her affection. —Poe: *Ligeia* (死においてのみ私は彼女の愛情の強さに心からうたれた。)

102 In your rocking-chair, by your window, *shall you dream* such happiness as you may never feel. —Dreiser: *Sister Carrie* (窓のそばの揺り椅子で、あなたが感じることもないかも知れないような幸福を夢みさせてあげよう。)

103 Behind them *were coats* hanging on pegs, in front of them *were snow-covered trees*. —Lewis: *The Lion, the Witch and the Wardrobe*

以下の例のように動詞が文頭に来る場合がある。これは例えば次の例で *There came the steps*. の殆んど無意味とも言える *There* を取り去った形であり日常語体である。従って文頭にありながらも卑近な言葉の *came* は余り強められたものではなく、重点はむしろ主語に置かれる。これはⅢに述べる、動詞が強められて文頭に来ている例とは形式上は似て非なるものである。

104 They stopped walking. *Came the steps* up the stairs. —Christie: *The Case of the Discontented Husband*

105 *Came frightful days of snow and rain*. —London: *Love of Life*

106 *Came a day* when he was almost unbearable. —Horn: *The Inert Body* (彼が殆んど我慢できない日がやって来た。)

II

補語である形容詞が強められて文頭に出た時にも倒置が見られることがある。補語を文頭に出すのは当然それを強めようとする為であり、文の均斉が関与することもある。倒置が起る時には補語の形容詞が副詞によって修飾され一層意味が

強められている場合が多い。Strange *Buck* was to him, (London: *The Call of the Wild*) では補語のみを強めたものであるに過ぎず、従って倒置は生じない。

107 So strong was her passion that it became something physical. — Anderson: *Winesburg, Ohio* (彼女の情熱が余りにも強かったのでそれは多少とも肉体的なものになった。)

108 nor could she gain on him, so great was his terror, nor could he leave her, so great was her madness. — London: *The Call of the Wild* (彼女は彼に追いつくことができなかった、それほど彼の恐怖は大きかった。また彼は彼女を振り切ることができなかった、それほど彼女の狂気は大きかった。)

109 so dazzling was the glitter of the yellow gravel, of the rocks, of the gravel again. — Buzzati: *The Killing of the Dragon* (黄色の砂利の、岩の、また砂利の、煌きはまぶしかった。)

110 Very different was the view taken by Demoyte's successor, the Reverend Giles Everard, whom... — Murdoch: *The Sandcastle*

111 Even more important were the intellectual changes, which... — Brubacher: *A History of the Problems of Education*

次例に見られるように主語が代名詞であっても倒置が生じる。sudden が最も強く、it がこれに次ぎ was よりも強い。もし it was の形をとれば was が it より強まる。116 の was she についても同じことが言える。113 では mad と共に文尾の not も強調されている。

112 So sudden was it, and so unexpected, that Back was taken aback. — London: *The Call of the Wild*

113 Yet, mad am I not — and very surely do I not dream. — Poe: *The*

Black Cat

分詞に関し次の過去分詞は孰れも形容詞に近く、副詞に修飾されている。動詞の意味が近ければ、例えば 114 の *insulated* は *been* の次に来るであろう。So much has our language been weakened that... (Orwell: *The English Language*) (我々の言語は非常に力づよさがなくなってきているので) のように。117 の *sitting* は状態を表わし、これも形容詞に近い。116では代名詞の *she* が強められて後置されているが、*she was* も用いうる。

114 so completely insulated had he been by the strange atmosphere of that other world. —Murdoch: *The Sandcastle* (それ程彼はあの 別の世界の奇妙な雰囲気完全に隔離されていたのだった。)

115 So affected was her mind by what she had seen,—Dreiser: *Sister Carrie*

116 so absorbed was she in her own thoughts. —*ibid.*

117 Well, sitting on Mrs. Hubbard's left is Nigel Chapman. —Christie: *Hickory Dickory Dock* (ええと、N. は H. 夫人の左に坐っていますよ。)

次の2例で最初の *would* の前置は文頭の句に引かれたものであるが *would be* I の語順では主語が強すぎて感じられ、後の例では *be* の延長である *will be* は弱く、*be* を名詞 *change* の後に回すことも可能であるが、そこまでその意味を強める必要があるとは思われない。74 の *DID stand* にも似た用い方であり主語を強めようとするものである。

118 Mad indeed would I be to expect it,—Poe: *The Black Cat*

119 The power of custom is enormous, and so gradual will be the change, that...—Butler: *Erewhon* (習慣の力は大きく、またその変化は極め

て徐々なるものなので)

感嘆文に関しても主語が強調されたり、それが修飾されて長くなっている場合倒置が見られる。主語の後置はそれが名詞である時は勿論、代名詞であってもそれを強めたものである。Poe の文章にはかなり多くの例が見られるが、彼の現代離れした、技巧にすぎることによるものであろう。Milne からの 2 例は感嘆符でなく、終止符で終わっている。

120 How devastating *are your emotions*. —Milne: *Not That It Matters*
(あなたの気持はどれ程気のめいるものであろうか。)

121 But how different a game *is golf*. —*ibid.*

122 But how much greater *was his horror*, —Dickens: *A Christmas Carol*

123 But the house! —how quaint an old building *was this!* —Poe: *William Wilson*

124 How for long hours *have I pondered* upon it! —Poe: *Ligeia*

125 How poignant, then, *must have been the grief* with which, —*ibid.*

補語である形容詞を強めて文頭に置いた時に多くの場合 so, very, even などの副詞がそれら形容詞を修飾していたように、強める為に文頭に置かれた目的語を many や much その他の強意を表す形容詞が修飾する場合が多い。しかしそのような場合でも必ずしも倒置形を取るとは限らない。128 の前半では倒置は行なわれず he knows となっている。This I bought. が This のみをやや強め I bought まで強める必要を感じていないのと同様である。129 も 127 と同様一種の強調であるが have 故分解しなかったものであり、倒置のない形も存在する。

126 What impressions of deep awe *did it inspire!* —Poe: *William Wilson*

127 “What business *had I* to go off like that!” —Galsworthy: *Indian Summer of a Forsyte* (あんな風に気を失うなんて何たることだ。)

128 Many things he knows of medicine and magic, and mighty deeds *has he performed*. —Lofting: *The Black Prince*

129 small chance *had a woman* to handle such precious things. —
London: *The Son of the Wolf*

比例比較にも倒置が見られることがある。比較の時には力点は当然比較の箇所におかれている為に大抵は倒置は行なわれていないが、2次的に強めようとするれば倒置の形も生じる。従って次例に見る *the more does he want* は *the more he wants* を分解して強めたものであり、後の例は *we are* を強めたものではなく (*are* を強めても無意味), *the more likely* に強い意味を感じて倒置が生じたものである。

130 *The more money he makes, the more does he want.*

131 *The sooner we get there, the more likely are we to get seats.*

III

修飾語も補語も文頭になく、以下の例に見られるように動詞自体が文頭に来て倒置の形になることがある。動詞を強調してそれに読者の注意を引き表現上の効果を出そうとするものであるが、「Return をしたんだ」と文頭の動詞は文尾の *did* の目的語の如く、殆んど動名詞の働きに近いものとなる。He returned. に比べて He did return. はより強く、これよりも Return he did. は更に強い。

132 *Return he did*, in the morning, —Malamud: *Pictures of Fidelman*

133 *but write it he did*, somehow, —Dickens: *A Christmas Carol*

134 and sign I did...William Shakespeare. —Miller: *William Ireland's Confession* (そして私は署名をしたんです...W. S. と)

135 And, in very truth, run and leap he did, —Christie: *The Mysterious Affair at Styles* (そして実際彼は走って飛びこえたのです。)

次の例に見られる倒置は she could not declare, he would not budge の declare, budge を強めて文頭に出したものであるが、後置された could not, would not は上述の文尾に置かれた did と同様文尾にあって declare, budge よりも更に強い。「できなかった、しようとはしなかった」ということを極めて強く表わす。

136 Declare the past to him by word of mouth she could not; —Hardy: *Tess* (口頭で彼に過去のことをうちあけることは彼女にはできなかった。)

137 We argued till he was reduced to hysteria, but budge he would not. —London: *The Heathen* (我々は彼がヒステリを起すまで議論した。しかし降参は彼はしようとはしなかった。)

Was it cold! 「cold であったのなんのって、寒かったのなんのって」のように *Was* が強められて文頭に出ることがある。Cold it was! の形は英国でも用いられる修辭的な言い方であるが、*Was it cold!* は主として米国で用いられる一種の倒置の感嘆文と見做しうる。次例の glad, freezing の両形容詞も I was indeed glad. の如き意味で強められ、リズムの点からも当然の語順となっている。

138 Was I glad to see her! —Segal: *Love Story*

139 The cold air hit me. God, was it freezing. —*ibid.*

140 Jesus, was he pleased! —*ibid.* (いやはや、彼のよろこんだのなんのって!)

上述とは逆に助動詞が文頭に来ることがある。これも米国口語に見られる一種の感嘆文である。141 について言えば *Laugh we did.* は *did* を最も強調したものであるが *Did we laugh.* は *Did* の位置が文尾よりも更に異状な位置に移り「～したのなんの」といったような感じを表わすが *laugh* の方はとり立てて強めてはいない。*We did laugh.* の強意の助動詞を倒置して更に意味を強めたものと考えられる。同様に 143, 144 についても助動詞を異状な位置に置くことによって意味を強調したものである。

141 Hey Eddie—what a picture we saw! *Did we laugh!* —Miller: *A View from the Bridge* (ねえおじさん、何ていう映画を見たんでしょう。私達本当によく笑ったわね。)

142 I call on the spirit of James Boswell! *Did you believe!* —Miller: *William Ireland's Confession* (J. B. の霊に呼びかけてみよう。あなた本当に信じましたね。)

143 *Will he see through it!* oh, Lord, no! —*ibid.* (お父さんは見破るだろう。おお神様、そんなことはない。)

144 “*Wont no nigger stop him,*” Nancy said. —Faulkner: *That Evening Sun* (黒ん坊じゃあいつの入ってくるのを止められねえ。)

倒置は略々一定している語順を逆用してある語句の意味を強調していることを伝えようとする手段である。最も多く見られる形式は副詞語句を強めて文頭に置く場合の倒置であるが、それら語句の強調されている度合は一律ではなく、それらの語句のみがやや強められたり、前文の語句との対比で文頭に置かれて強められているような場合は、それらの影響力は動詞まで及ばず倒置は生じない。

副詞語句が文頭に置かれ且つ強調の度合が大であることを示そうとする時には一般的傾向として主語・述語を倒置させるが、否定の副詞を文頭に置く場合には、複

合時制の時では勿論、単一時制の時でも助動詞 *do* を用いて動詞を分解して主語の前後に分置する。

しかしそれらの語句と共に主語をも強めようとするれば、複合時制の時でも動詞はすべて主語の前に置かれ、単一時制の時でも動詞はそのままの形で、あるいはその動詞を *do* を用いてやや強めて主語の前に置くこともある。即ち強められた主語は文尾に来るが、それは単一の名詞、時には代名詞であることもあるが、主語自体が長い形容詞節等が付随して長くなっている場合が多い。この形が特に多く見られるのは文頭に *there* を用いた場合、用いなくてもそれに代るあるいは類する語句がある場合である。しかしその時でも特に強めようとするれば本動詞は主語の後に来るが数は極めて少いように思われる。

一般的に倒置する必要がないのに倒置されているのは古い、もしくは修辭的、用法であり、単一時制のままで使用しうる時に助動詞 *do* を用いて分解しているのは、その動詞を強めた証拠であると言える。これに関連して *have, come, go* 及びそれに類する動詞に関しては *do* の援用は少い。日常卑近な語を *do* を用いてまで強めることは特別な場合を除いて理由がないからである。

要するに形としては倒置は単一時制がそのまま使用されることもあり、*do* を援用することもあり、その場合でも全部の動詞を主語の前に置くこともあれば、前後に分置することもある。複合時制にも同様のことが言いうる。それらを決定するのは文頭の語句、主語及び述語の意味の強度、更には文の均斉、時としては文のリズムである。そしてその根底には意味の明確適切な伝達への希求がある。